



〒 399-0711 長野県塩尻市大字片丘字南唐沢 6342-4

TEL (0263)53-8802

FAX (0263)51-1290

E-mail : sogokyoiku-kikaku@pref.nagano.lg.jp

目次

「所長挨拶」	p.1
「調査研究事業の報告(調査研究Bチーム)」	p.2,3
「調査研究事業の報告(調査研究Dチーム)」	p.4,5
「調査研究事業の報告(調査研究Eチーム)」	p.6,7

所長挨拶

「磨かん共に」ウェルビーイングを追求し実現できる場に

長野県総合教育センター所長

日頃、センターの諸事業に御理解・御協力いただいておりますことに心より感謝申し上げます。センターでも新年度を迎える準備を進めています。令和6年度の各事業を振り返り、成果と課題を明らかにした上で、令和7年度も充実した事業が展開できるよう、所員一同取り組んでまいります。

今の学習指導要領が実施される中、それぞれの学校でその趣旨を生かした「個別最適な学び・協働的な学び」が推し進められ、探究的な学びの実現に向け、不断の努力がなされています。これらを支える教員研修(先生方の学び)はいかにあるべきか、総合教育センターの大きな課題の一つとして取り組んできています。

対話と探究、参集とオンライン、中堅と若手の世代を超えた研修、長年蓄積されたノウハウとICT利用など、それぞれの良いところを取り入れて実施してきました。

私たちの目の前にいる子どもたちが将来、生きていく社会は「超スマート社会(Society 5.0)」と呼ばれ、おそらく誰も経験したことのない課題が待ち受けるものになると思われます。何が正解なのか判断に迷うことが当たり前になるかもしれません。正解がどれだか分からない問題に取り組み続けることを求められる子どもたちに「未来社会の創り手」となるために必要な資質・能力を育むことはとても難しいことであると考えます。

では、この課題を解決するために学校は何をしなければならないのでしょうか。学校は「子どもが育つ場」となる必要があります。それは大変な仕事であり、また、社会にとっても重要な仕事でもあります。

本来研修は、自己啓発・自己研鑽に基づくキャリアアップを目的とするものであるため、これまで、どちらかというとその成果が個人(点)にとどまっていたと思います。これからは、教員全体の質的底上げを図る上で、個人から組織(面)へ繋げていく、広げていくことが不可欠です。

センターでは、様々な参加・体験や探究的な学びの手法を取り入れた受講者同士がつながる研修内容の充実、あるいは研修成果を共有するための受講者と所属校職員をつなげる仕組みづくりなど、「つなぎ、つながる」ことを大切に来年度の研修講座を構築して、研修の成果がより多くの子どもたちに還元されるよう取り組みたいと思います。

今後も、センターとして「子どもたち、先生方、学校のために何ができるか」を第一に考え、センターでの研修が先生方に広く開かれ、教員同士の個別最適で協働的な学びの場となるよう努めてまいります。また、「磨かん共に」の精神をブラッシュアップしながら、研修や日々の実践からくる学びを活かし、先生や学校を支援できればと思います。今後ともよろしくお願いします。

はじめに

本調査研究の目的

各校では、図1にあるように子どもたちの資質・能力の確かな育成のため、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善、そこにつなげる「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を大切にした実践がなされている。それに関連して近年は特に、個別最適な学びを支えるための、単元内自由進度学習の実践が県内各地で増えてきていると実感している。一方、先生方からは、「私たちの単元内自由進度学習は本当に子どもたちの資質・能力の育成につながっているのだろうか」と心配する声も聴かれる。そこで、本調査研究は、継続的に単元内自由進度学習に取り組んでいる学校の実践を基に、どのような単元内自由進度学習が子どもの資質・能力の育成につながるのか、子どもと教師の変容と併せて考察することを目的とする。

学習指導要領に示された目標や内容の実現
資質・能力の確かな育成

「主体的・対話的で深い学び」
の視点からの授業改善

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の
一体的な充実

図1「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(答申)
を基に作成

松本市立寿小学校の単元内自由進度学習の学びの姿

松本市立寿小学校(以下、寿小)は、松本市のリーディングスクールとして、県外視察やそれを基にした単元内自由進度学習の実践を昨年度から行ってきた。今年度はその成果を生かして、全学年で単元内自由進度学習の実践に取り組んでおり、私たちはその公開研究会で授業を参観させていただいた。1年生は互いの進度を必要以上に意識することがないように、また、児童の自己決定の幅を広げることができるよう、算数科「形づくり」と生活科「リースづくり」の2教科並行型の授業が行われていた。その授業の様子や子どもの学びの姿を紹介する。

Aさんの学びの姿

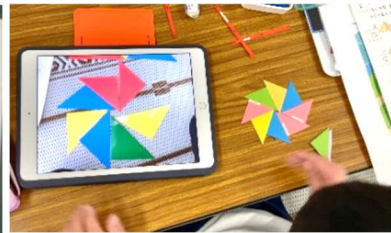
この日の授業は全8時間中4時間目。Aさんは前時に続き、この日も算数を学習する計画を立てた。Aさんはまず、棒並べから学習を進めた。課題として提示された絵を見ながら、それをよく見て同じ形を並べ、できあがった形をタブレットで撮影し、記録をした(写真①)。その際に、Aさんは前時に記録した7枚の色板で作った風車のような形の写真が目に入ったのか、それを開き、壁の掲示(写真②)と見比べながら、「なんか変だな」とつぶやくと、形づくりに使われている板の数を数え、タブレットの横に8枚の色板で正しい風車の形を作った(写真③)。風車の形を作ると、担任の先生に、「やりたいことはだいたいできたよ!」と報告すると、今度は、ヨットや魚の形が何枚の色板で作られているのかを答えるプリントに取りかかり、自分で答え合わせをしていた(写真④)。終わりの時間が近付くと、満足気な表情を浮かべたAさんが教室に帰ってきた。そして、「いっぱいプリントをかくじかんがあつてうれしかった」と自分の学習を振り返り、本時の授業を終えた。



写真①



写真②



写真③



写真④

Aさんをはじめとした子どもたちは、2教科並行型の単元構成や、教材や教具などの環境構成(写真⑤)によって、ガイダンスを基にしながら立てた自分の計画に沿って、学び進めていた。これは、単に一方向だけに学習が進むのではなく、自分がやりたい課題に戻ることができたり、自分が納得いくまでじっくりと一つの課題に取り組むことができたりと、取り組む内容や方法、時間、場所を自己決定し、自分自身で学びを最適化する機会が保証されていたことが理由の一つであろう。そして、その結果として、子どもたちには粘り強く学習に取り組んだり、自分で学習を調整しようとしたりする姿が見られた。また、Aさんの学びの姿や表情、学習カードの記述は「身の回りにあるものの形に親しみ、算数で学ぶことのよさや楽しさを感じながら学ぼうとしている」姿として捉えることができる。今後、発展課題に取り組む等、学びを広げたり深めたりすることで、寿小の研究課題である「主体性を高める授業」に更につながっていくと考えられる。



写真⑤

資質・能力が育成される単元内自由進度学習のための寿小の手立て

ここで、Aさんが前述のように学ぶことができた背景にある手立てについて考えてみたい。

寿小の研究会では、下の図2のように、どのように単元内自由進度学習の準備をするのか、研究主任より①～⑦の項目が示された。それぞれの項目については、次のような意図があると考える。

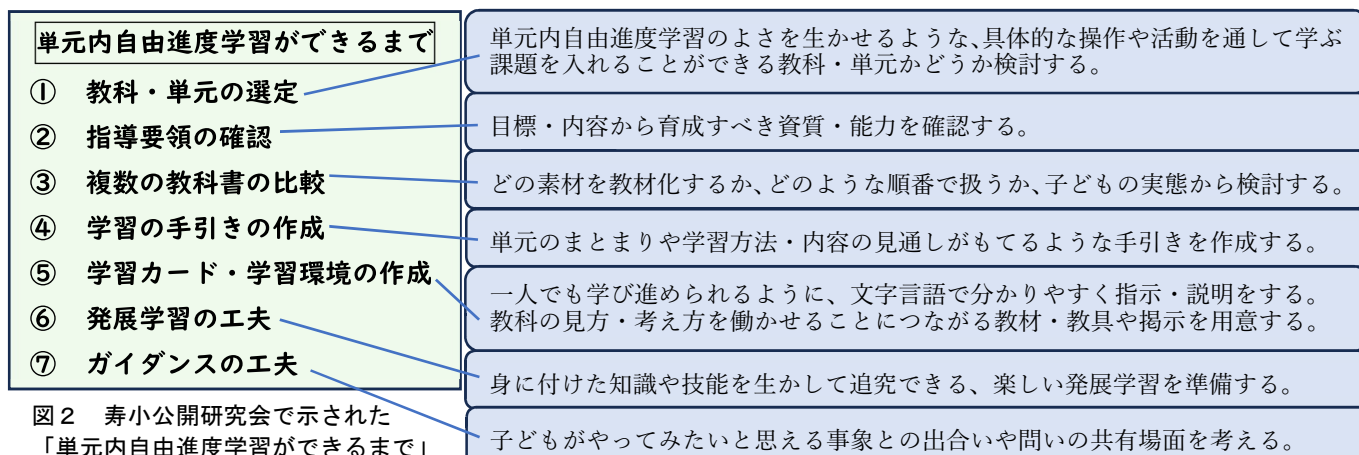


図2 寿小公開研究会で示された「単元内自由進度学習ができるまで」

寿小の研究成果から、子どもが主体的に取組み、資質・能力が育成される単元内自由進度学習を構想していくためには、何をどのように指導・評価するのか、何より子どもがどのように学びを進めていくのかについて明確にしながら必要な手立てを講じていくことが大切である。

単元内自由進度学習の実践を通した子どもと教師の変容

資質・能力が育成されていくと、教師や子どもにはどのような変容が見られるのか。先生方に、次の2点について質問をし、得られた回答をボックス内に記述する。



単元内自由進度学習に取り組む中で、先生ご自身にどのような変容がありましたか？

- ・授業の「準備」の大切さを改めて感じ、また、こちらが必要以上に指導せずとも、子ども自身に学ぶ力(学びたい気持ち)があることを再認識した。
- ・教材研究を単元のまとまりで行うようになり、より一層その教科の内容や目標、見方・考え方を確認するようになった。



単元内自由進度学習に取り組む中で、児童にどのような変容が見られましたか？

- ・教師に頼らず、自分の計画に沿って、学習に取り組もうとするようになった。
- ・どれぐらい課題に時間がかかりそうか、見通しを持てるようになってきた。また、時間が足りないときには子どもの方から「後〇分ください」と言うようになった。
- ・学習面・生活面において、主体的に取り組む姿が多く見られるようになったと感じる。

この回答から、寿小の先生方が単元内自由進度学習の実践を通して、子ども自身の学ぼうとする力を信じて子どもに学びを委ねることや、単元や題材など、内容や時間のまとまりを見通して授業づくりをすることの大切さを実感していることが読み取れる。これは、単元内自由進度学習に限らず、どのような授業づくりにおいても重要なことではないだろうか。また、子どもたちの変容に目を向けても、単元内自由進度学習の中での育ちが、学習の場面で自らの学習を調整しようとする姿の現れだけでなく、生活の場面においても主体的に取り組もうとする姿にもつながっていることが伺える。

おわりに

本稿では、松本市立寿小学校の実践から、資質・能力の育成につながる単元内自由進度学習のあり方についての一考察をお示しさせていただいた。本稿で示した単元内自由進度学習は、個別最適な学びを実現するための授業づくりの一つであり、それが全てではない。大切なことは、各学校の子どもたちや先生方の実態や強みを生かして、授業改善の目的である資質・能力の育成に向けて、それらが育成された子どもの姿を具体的に示して授業改善を進めていくことである。また、授業改善の内容や方向を教職員同士で検討・共有するだけでなく、子どもたちが自らの学び振り返り、調整することにつながるように、子どもたちとも共有したい。

「個別最適な学び」が着実に実現されることによって育成された資質・能力が「協働的な学び」の中でどのように発揮され、どのように育成されていくのかといった「一体的な充実」のあり方については、今後の研究課題としたい。

一人の子どもも取り残されない「多様性を包み込む」学びの環境をつくるために ～教室で困っている子が困らなくなるためにできること～

研究の背景

UDL（学びのユニバーサルデザイン）の視点で授業づくりを考えることを柱に

昨年度までの調査研究では、教室で困っている子が困らなくなるために環境調整や「授業のUD化」を進めるための視点を動画やチェックシートで紹介してきました。そして、教室の中の多様な子どもたちの学びを支えるためにさらなる授業改善の方策を模索していたところ、UDLの考え方に出会いました。

これまで私たちが進めてきた「授業のUD化」とは何が違うの？…「個別最適な学び」の方策につながりそう…考え方だけでは具体的な実践が見えてこない…など新たな問いが生まれてきました。

そこで、UDLの視点で授業づくりを考えることは、多様性を包み込む学びの環境をつくるための新たな方策につながるのではないかと考え、その具体について調査研究することとしました。

調査研究の内容

- ◆「多様性を包み込む」授業づくりの方策としてUDLについて調査研究し、研修講座に生かす。
- ◆実践校の視察を行い、具現化に向けてのポイントを整理し、受講者の実践に役立つ事例を収集する。

UDL（学びのユニバーサルデザイン）とは？

学びのエキスパートを育てることを目標とする 脳科学に基づいた考え方

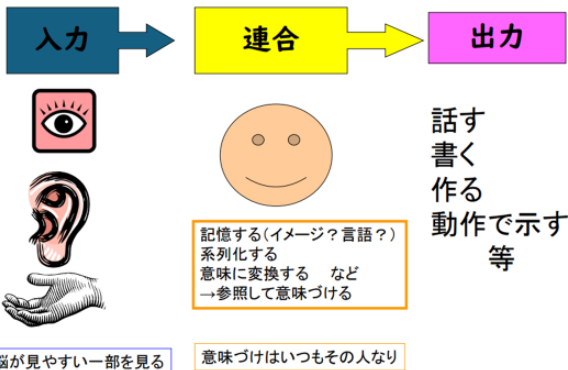
- ・一斉指導にとらわれず、子どもの多様な特性に合う「オプション」を提供する
- ・「オプション」を子ども自身が選び、活用できるように支援する
- ・教師はファシリテーター役になる

…状況に応じて説明やデモンストレーション、アドバイス、フィードバックをして子どもの学習を促す



多様な認知の特性

情報を処理するプロセス



研修講座「通常の学級で学びにくさの壁を壊そう!」高橋あつ子講師スライドから

オプション（例 漢字の覚え方）

複数の学び方を考えよう

漢字の覚え方	
	語呂合わせ（「木の上に立って見るのが親」など） 書き方を唱える学び方
	フラッシュカード イラストで覚える漢字
	漢字パズル 書き取り 粘土で漢字を作って触る

研修講座「通常の学級で学びにくさの壁を壊そう!」高橋あつ子講師スライドから

多様な特性に応じて 多様な方法を提供

視察校の実践から

UDL の実践校（神奈川県）を視察しました

◆視察校の実践のポイント

- ・「安心できる 居心地のよい 一人一人に居場所がある 温かな環境づくりや指導・支援」を土台に 学級・学校づくりをしている
- ・対話的 主体的 かかわりを大切に UDL の視点から授業づくりに挑戦している

<実践校 ワークシートから>

2年生 算数「かけ算」の様子

さまざまな学び方で

目標も学び方も子どもたちが自分で選びます

本時の目標

「順番に」「ランダムに」を選ぶ

- | |
|-----------------------|
| ① 九九を見て、じゅん番に と答えられる。 |
| ② しきを見て、じゅん番に と答えられる。 |
| ③ しきを見て、ランダムに こたえられる。 |

速度やテンポも自在に調整

歌

動画

唱えて

歌って

確かめて

見て

聞いて

九九表

かけ算カード

答えて

かかわりながら

録画

カルタ

視察校から学んだ視点

子どもが学びの主体者になるために

- ・UDL 実践の土台として、安心して学んだり、表現したりできる温かな学級づくりがなされている
- ・学習目標（ルーブリック）を設け、学ぶ目的が明確になることで、意欲的な学びが成立している
- ・教師はクラスの子どもの実態に応じて学び方を選べるようにし、子どもたちが自分に合った学び方で学んでいる。特に ICT の教材を活用することで豊富な学習メニューが用意しやすい
- ・教師の一方的な教え込みではなく、子どもの選択や意欲を支えることで主体的な学びが成立している
- ・子ども自身が「〇〇の方法でやったら～できた」「〇〇が自分にはやりやすい」など、自分に合った学び方に気づき、別の機会にも活用できるようにふりかえりを支えることが大切



私たちがこれまでの実践の中で

すでに取り組んできたことも多くある！

是非ご活用ください

※上記の内容について 次年度の研修講座で学んでみませんか

令和 7 年度特別支援教育研修講座 早稲田大学 高橋あつ子講師をお招きし、UDL について学びます
「通常の学級で学びにくさの壁を壊そう！」(A: 小学校 6月2日) (B: 中学校 6月23日)

教職員研修会サポートにて、研修講座での学びを職場で共有したり、実践してみたいの悩みや改善点を整理、検討したりするお手伝いを専門主事が一緒に行うことも可能です。

【調査研究報告 調査研究 E チーム】

研究テーマ： 「オンライン授業の充実」

【経 過】

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実の実現に向け、すべての生徒に対して多様かつ高度な教育に触れる機会の提供と、特別な支援が必要な生徒に対する学習機会の確保と支援を目的とした遠隔教育について研究を進めてきました。

昨年度は、先進的取組を視察・調査し効果や課題について検討してきました。本年度は試験的実践からオンラインによる授業の検証を行いました。

【目 的】

遠隔教育を学びの保障と学びの充実に目的分類し、分類ごとに試験的実践から検証を行う。

【内 容】

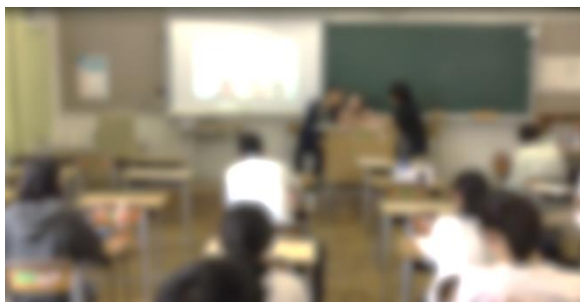
連携校での実践

県内の連携校で試験的に実践を行った。

学びの充実を目的とした遠隔教育の実践

- ◆ 配信校：松本県ヶ丘高等学校
- ◆ 受信校：WWL コンソーシアム構築支援事業関係校
- ◆ 内 容：小論文講座
- ◆ 方 法：オンライン配信、オンデマンド配信

文部科学省事業採択による「WWL コンソーシアム構築支援事業」においてオンライン配信とオンデマンド教材化に向けた取組を行っている。松本県ヶ丘高校で年間を通して行っている「小論文講座」を他校へ同時配信する実践について支援を行いました。



授業の様子①



授業の様子②

効果と課題は以下のとおりです。

効果：一つの学校の取組を全県で共有することができる。

最小限の配信機材を使用することでどこでも配信が可能である。

オンデマンド教材にすることでいつでもどこでも学ぶことができる。

外部講師を招へいしての講演会など複数校で共有することができる。

課題：一方的な配信にならないような、双方向での対話の工夫

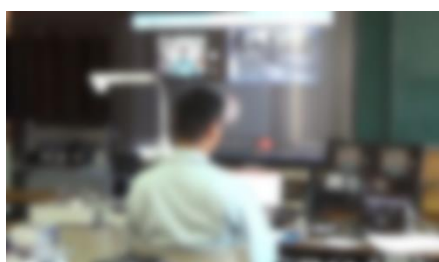
オンラインを使った取組の周知の工夫

学びの保障を目的とした遠隔教育の実践

- ◆ 配信校：総合教育センター
- ◆ 受信校：松本工業高等学校
- ◆ 内 容：シーケンス制御実習
- ◆ 方 法：総合教育センターからのオンライン配信授業
- ◆ 機 材：配信側→PC、電子黒板、書画カメラ、映像スイッチャー、実習機器
受信側→PC、プロジェクタ、生徒一台端末、実習機器

高等学校において遠隔授業で単位認定が可能となり、生徒数の上限や認定単位数の上限など様々な制限がある中、オンライン授業が担う役割が増してきています。

現状、座学が多く、実技系の科目での実践は少ないと考えます。特に産業教育での実習などの科目では危険を伴うこともあり遠隔教育の難しさが指摘されています。そこで実技系科目の実践授業を行い、検証しました。



配信側の様子



受信側の様子

効果と課題は以下のとおりです。

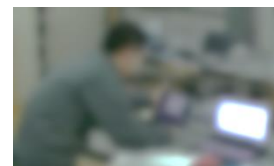
効果：書画カメラにより実習機器の細かなところまで配信できる。

映像スイッチャーにより一人で配信することが可能となる。

受信側機材を最小化することで準備や機器トラブルなど受信側の負担を軽減できる。

生徒の一台端末で実習機器の動作確認ができる。

サポート支援教員により、生徒の把握することができる。



課題：危険を伴う実習の際の安全面の確保
グループ活動や個々の取組の把握

【まとめ】

成果

- ◆ ICT 機器やネットワーク環境を含めたハード面だけでなく、授業者の動きやサポート支援の方法などのソフト面がともに充実していく必要がある。
- ◆ サポート支援のあり方がオンライン授業をする上でのキーポイントになると考える。
- ◆ 実技を伴うオンライン授業においては、安全面を確保するための工夫としてサポート支援を含めて十分な配慮が必要となる。

検討事項

- ◆ 遠隔授業の目的の明確化
- ◆ 子どもたちの学びの質を高めるためのサポート支援の研究
- ◆ 子どもたちの細かな変化（しぐさや表情）をとらえる工夫
- ◆ 導入する際の組織体制、運用などハード面の検討